

紙 碑

立石友男先生のご逝去を悼む



2003年6月5日 石井實氏撮影
(石井實フォトライブラリー 国立歴史民俗博物館蔵)

2017年7月11日、あまりにも突然の訃報が届いた。本会元会長立石友男先生が逝去された。享年84歳であった。奥様のお話によると、9日の朝ご自宅の庭の手入れ中に倒れ救急搬送されたものの意識が戻らぬまま、11日に眠るように息を引き取られた。

立石先生は1933年長野県茅野市に生まれた。長野県立諏訪清陵高校を卒業後、日本大学人文学部人文地理学科（現：文理学部地理学科）に進学、1959年には修士課程を修了されると同時に日本大学文理学部副手に、1960年からは同学科助手となられ草創期の地理学教室の運営、後進の指導などに力を注がれ

た。当時のことはあまり口になされなかったが、普段の温厚な先生とは打って変わり、うつむき加減でゆっくりと言葉を選びながら語られる、先生の表情からもそのご苦勞が十分に伝わってきたことを覚えている。以後、1970年に専任講師、1973年に助教授、1981年には教授とられた。1959年より始まった先生の日本大学での職務は40有余年続き、2003年にご退職を迎えられた。

その間、日本地理学会をはじめとした多くの学会に所属されるとともに、学会運営にも意欲的に関わられた。とりわけ、歴史地理学会では1974年に評議員および常任委員、1990年からは常任委員長、1996年に庶務委員長、1999年からの3ケ年は歴史地理学会会長に就任され、学会の発展・運営に大いに貢献された。筆者は先生の教え子の一人であり、よく先生とともに学会に赴いた。学会会場までの道中に受けた特別講義は、筆者にとって貴重な思い出である。

先生は多数の著書・論文を手がけられているが、『スキャンディナヴィア―白夜・極夜の国ぐに―』（1987年、古今書院）は単著として刊行された初めてのものである。1977年および1985年の2回の調査をもとに、北欧の自然環境や歴史的背景などをまとめた概説書である。ご著書においてとくに注視すべきは、主題図を重視した構成であろう。具体的な事象の説明における地図の有効性および必要性を痛感されていた先生ならではの拘りが、ふんだんに盛り込まれている。筆者は大学院時代、講義でよく当著書の原図版を拝見した。

パソコンによる描画が当たり前となった今日、ロットリングを使った手書き主題図は実に美しいものであり、先生のきめ細やかで粘り強い性格をもあらわしていたと思える。筆者らに対する作図指導は授業の導入であって、地理学研究における地図化は重要な手法であることに話はいつも及んだ。こと地図化の話になると、先生のお顔はいつもより幾分紅潮していたように記憶している。興奮冷めやらぬまま、講義は毎週のように教室を居酒屋にかえて続いた。先生はほとんどお酒を飲まれないのであるが、われわれ学生に付き合って下さる良き師であり、良き親父でもあった。

先生の研究テーマは森林・林業に関するもので、その手法はいわゆる地籍図や森林基本図などの大縮尺図を利用することであった。とりわけ、海岸砂丘林の造成過程に関する調査・研究に傾注され、その成果はご著書『海岸砂丘の変貌』（1989年、大明堂）にまとめられた。海岸砂丘林に興味を抱かれる従前には、山地の林業経営・山村問題、高度経済成長期以降の平地林についても扱われた。『海岸砂丘の変貌』は庄内砂丘を主とした考察であるが、海岸砂防林研究にとって今もなお大きな示唆を与えている。そもそも、先生と砂丘ないし砂防林との出会いは、昭和35年に実施された津軽屏風山砂丘の調査であったとお聞きしているが、現在、車力村（現：つがる市）の海岸防災林および主たるフィールドであった庄内砂丘と砂防林は、文化庁の「農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」の対象であり、今後の保護や活用のためにも先生の研究が再評価されるはずである。

先生の地理学への情熱は尽きることはなく、ご退職後に心血を注がれたのが島方洗一企画・編集統括『地図でみる 西日本の古代律令制下の陸海交通・条里・史跡』（2009年、平凡社）および『地図でみる 東日本の古代律令制下の陸海交通・条里・史跡』（2012年、平凡社）である。これは、2001年に創設百周年を迎えた日本大学文理学部の記念事業の刊行物「文理学部叢書」に端を発している。両著のなかで先生は編集主幹を務められたが、そこに通底するのは一貫して（歴史）地理学的研究の成果を地図上に表現することであった。先生は日本大学文理学部の一室にこもり、時間の大半を地図との格闘に費やされた。机の上には数え切れない程の大縮尺図が広げられ、凝視するお姿は在りし日の籠瀬良明先生を彷彿とさせたが、ご自身でも「最後の仕事」といわれていたことを鮮明に覚えている。足かけ10年にも及ぶ歳月を費やし出版した達成感はお有りになったのであろうが、同時に「さすがに疲れたよ」という先生の呟きが今も耳に残っている。

四十九日の法要を待つて弔問に伺わせていただいた。奥様はあまりにも突然のお別れに何度となく無念さを滲ませておられた。そのお言葉の端々からは、優れた研究者であり良き指導者であった先生が、実はご家族に対する深い愛情に満ちた良き家庭人でもあったことを伺い知ることができ、改めて先生の人となりに触れたような気がして感無量であった。

重ねて先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌
(山崎達夫)